

西川りゅうじんの先取りマーケティング塾

「地劇」が地方創生の幕を開ける

～地域発の演劇が活性化のマグネットに～

西川りゅうじん (にしかわ・りゅうじん)
 マーケティングコンサルタント



「地劇」による地方創生の担い手「わらび座」



「わらび座」による平賀源内を題材にした『げんない』の舞台。『解体新書』の扉絵を描いた秋田県仙北市角館出身の小田野直武は源内の影響で才能を開花させた。地元ゆかりの人物を扱う「地劇」が地域に誇りを与える

地域発の演劇、「地劇」によって、まち・ひと・しごとを育み、地方創生につなげようという動きが全国的に広がつつある。そのさきがけとなっているのが、秋田県仙北市の「わらび座」だ。

「わらび座」は、人口2万8000人弱の山間部のまちに拠点を置きながら、国内外で年間1200回のミュージカル公演を行い、48万人の観客を動員する。その数は、劇団四季、宝塚歌劇団に次ぐ規模を誇る。しかも、あくまで、東北、秋田にこだわり、地域ゆかりの人物を題材にしたオリジナル作品を主に上演している。

秋田県男鹿半島の「なまはげ伝説」を題材にした『男鹿の於仁丸』、平安時代初期に実在した蝦夷のリーダーを描いた『アテルイ』、秋田県湯沢市小野出身と伝わる絶世の美女『小野小町』、岩手県花巻市出身の宮沢賢治作の『銀河鉄道の夜』といった、まさに地域に根差したテーマの「地劇」を演じてきた。



「わらび座」の山川龍巳社長。18歳で舞台に衝撃を受け、故郷の長崎県を飛び出して以来、「地劇」に人生をささげてきた。劇場、温浴・宿泊施設、プルワリーやレストランなどを擁する「たざわこ芸術村」の社員370人を率いる

現在、グループの社員数は370人。一地方劇団に留まらない全国レベルの文化事業複合体となっている。3万坪の広大な敷地には、客席数710席の「わらび劇場」はもとより、温浴・宿泊施設「温泉ゆほぼ」、「田沢湖ビール」のプルワリーやレストラン、伝統工芸体験施設「森林工芸館」など多様な施設が建ち並び、「たざわこ芸術村」と呼ばれる一大リゾートエリアを形成している。

終戦後の1951年、石油技術者として南方に徴用されていた原太郎さんが、東京や北海道で音楽活動を開始。秋田出身のメンバーがいた縁で、1953年に民謡の宝庫である田沢湖町(現・仙北市)に拠点を移す。かつて飢饉の際に農民を救ったわらびのように人々の生きる力になるという願いを込め、「わらび座」の名で演劇を始める。

1980年代以降、急速に地域経済が輝きを失って行く中で、「わらび座」も倒産の危機に瀕する。しかし、アメリカ・オレゴン州のアッシュランド市のシェークスピア劇場の視察をきっかけに息を吹き返す。前社長の小島克昭さんが、人口1万人の同市に毎年50万人が観劇に訪れるのを見て一念発起。全国トップレベルの演出家を招聘し、東北の歴史・伝統・文化を現代風に演出した「地劇」を上演するようになり、成功を収める。

地域において、「わらび座」は、観光収入をもたらし、雇用を創出し、さらには郷土意識を高めるなど大きな貢献を果たしている。2006年には、愛媛県で事業を営む事業家と連携して、同県東温市に「坊ちゃん劇場」をオープンするなど、今や「地劇」による地方創生の担い手として各地から引っ張りだこだ。

18歳のときに「わらび座」の舞台に衝撃を受け、故郷の長崎県を飛び出して以来、「地劇」に人生をささげてきた現社長の山川龍巳さんは、「日本中に無限に眠る地域資源の鉞脈を掘り起こせば、必ず地域は元気になる！」と力説する。

西川りゅうじんの先取りマーケティング塾

「地劇」が地方創生の幕を開ける

～地域発の演劇が活性化のマグネットに～

西川りゅうじん（にしかわ・りゅうじん）
マーケティングコンサルタント

中高生の地域への誇り育む現代版組踊『肝高の阿麻和利』



沖縄県うるま市の中高生による現代版組踊『肝高の阿麻和利』。エイサーや琉球舞踊などの伝統芸能に現代的音楽やダンスを取り入れた沖縄版ミュージカル。見る者すべてが「なだそうそう」（涙がとどめなく流れる）の心に染み入る舞台

「地劇」が、青少年育成の継続的な手段と場となり、ひいては、地域活性化に大きく貢献している代表例が、沖縄県うるま市の中高生による現代版組踊『肝高の阿麻和利』（きむたかのあまわり）だ。

組踊（くみおどり）とは、音楽、舞踊、台詞で構成される琉球古典劇で、300年の歴史を有する。そして、現代版組踊は、エイサーや琉球舞踊など沖縄の伝統芸能に、現代的音楽やダンスを取り入れた沖縄版ミュージカルとも呼ばれる新たな「地劇」だ。

肝高（きむたか）とは、琉球の古語で気高いという意味。阿麻和利（あまわり）は、15世紀の沖縄の戦乱時代、住民に悪政を強いていた前城主を討って勝連（かつれん）の按司（あじ＝地域の支配者）となった伝説の風雲児だ。東南アジアとの交易によって地域を繁栄させた。しかし、天下統一の野望を抱き、首里城を攻めるも逆に王府軍に攻め滅ぼされたとされる。

『肝高の阿麻和利』は、うちなんちゆう（沖縄の人）もやまとんちゆう（本土の人）も見る者すべてが「なだそうそう」（涙がとどめなく流れる）の舞台である。地元の中高生だけで、毎年、卒業生を送り出しキャストを入れ替えつつ演じているとは思えない完成度の高さだ。

2000年3月の初演以来、公演回数は251回を数え、観客動員数はのべ15万人を突破。沖縄県内はもとより全国各地、ハワイでも公演が行われた。2009年には、日本ユネスコ協会連盟による、100年後の子どもたちに伝える地域文化・自然遺産をテーマとした「第1回プロジェクト未来遺産」に登録されている。

しかし、スタート時点では誰も今日の成功を予想していなかった。きっかけは、1999年、当時の勝連町（現・うるま市）の教育長だった上江洲安吉さんが発案した体験教育だった。阿麻和利が謀反人である定説を払拭し、子どもたちに地域に誇りを持ってもらうことを目的に現代版組踊を創り出すこととなった。

脚本に嶋津与志さん、演出に平田大一さんを迎え、出演者を地域にある4つの中学校の生徒から募ったものの、練習初日に参加した生徒の数はわずか7人だった。その後、開演までの3カ月間、参加者が周りの友達に練習の楽しさを伝えることで参加者も徐々に増え、最終的に150人もの出演者が舞台上上がった。

初演の会場は、世界遺産にも登録された「勝連城跡」での野外公演。3月の寒風吹き刺す夜公演に観客が集まるか一抹の不安を抱えながらの開演だった。ところが、幕を開けてみると、2日間の公演の動員人数は4200人も上った。

当初、公演は2日間限りの予定だった。しかし、出演した子どもたちが舞台の再演と出演者枠を高校生にまで広げてほしいとの嘆願書を作成し、教育委員会に提出した。その熱意によって継続が決定し、現在に至る。

『肝高の阿麻和利』の15年にわたる驚異的ロングランは、子どもたちが起こした「地劇」による地方創生の奇跡の軌跡である。

西川りゅうじんの先取りマーケティング塾

「地劇」が地方創生の幕を開ける

～地域発の演劇が活性化のマグネットに～

西川りゅうじん (にしかわ・りゅうじん)
 マーケティングコンサルタント


「マグカル」で東洋のブロードウェイ目指す神奈川県



神奈川県と横浜市が連携したまちづくり委員会「マグカル・テーブル」において、「地域を文化芸術の磁場とし魅力とにぎわいを創出しよう!」と呼びかける黒岩祐治知事。東洋のブロードウェイを目指し各種施策を展開している

近年、県を挙げて、地域発のミュージカルや演劇をはじめとする「地劇」のセンターを目指し、注目を集めているのが神奈川県だ。地域に文化芸術の磁場を創り、魅力とにぎわいをもたらす「マグカル」(マグネット・カルチャー)事業を展開している。

そのために神奈川県と横浜市が連携して有識者によるまちづくり委員会「マグカル・テーブル」を設置。テーブルマスターは、県の黒岩祐治知事と市の林文子市長が務めている。

委員会には、劇作家の横内謙介さん、演出家のラサール石井さん、アーティストの白井貴子さん、携帯電話の着メロを開発したフェイス・グループ代表で日本コロムビア会長の平澤剛さん、ライブハウスZeppを展開するボックスステージプロジェクトの杉本圭司さん、横浜市立大学教授の鈴木伸治さん、県民ホール館長の眞野純さんをはじめ多士済々の委員が集い、私が座長を務めさせていただいている。

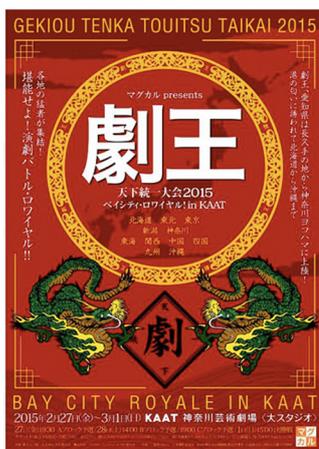
黒岩知事は、早稲田大学在学中にはミュージカル研究会に所属していた。その後、フジテレビ「報道2001」のキャスターのときから、聖路加国際病院の日野原重明理事長の企画・原案による、レオ・バスカリア作の絵本を舞台化した『葉っぱのフレディ いのちの旅』の総合プロデューサーを務める斯界の専門家だ。

まず、同県では、2012年度末から、ネット上に「MAGCUL.NET」を立ち上げ、ポータルサイトとFacebook、Twitterを通じて、県内のあらゆる文化芸術に関する情報をリアルタイムで発信している。

そして、「マグカルフェスティバル」と題し、キング(県庁本庁舎)・クイーン(横浜税関)・ジャック(開港記念会館)の「横浜三塔」を活用するなど、年間を通じてさまざまなイベントを展開。一方、県立青少年センターを若者の舞台芸術活動の拠点「マグカル劇場」として開放している。

また、横内謙介さんを塾長に、歌、ダンス、演技を専門的に学びたい若者を対象に、実践的な舞台芸術人材の発掘・育成を目的として、「マグカル・パフォーミングアーツ・アカデミー」を開校。

短編演劇の王者を決定する「劇王 天下統一大会2015」のポスター。「マグカル」の目玉として神奈川県が誘致した。全国各地から選ばれたファイナリスト12組がオリジナルの劇を披露し、観客と審査員の投票によって「劇王」が決められる



さらには、短編演劇の王者を決定する「劇王 天下統一大会2015」を誘致し、2月27日～3月1日、KAAT(神奈川県芸術劇場)で開催する。上演時間20分以内、役者は3人以内、数分で転換できる置き道具、基本舞台は奥行4間×4間というルールの下、北海道から沖縄の各地から選ばれたファイナリスト12組がオリジナルの劇を披露し、観客と審査員の投票によって「劇王」が決められる。審査委員長のラサール石井さんを筆頭に、鴻上尚史さん、渡辺えりさんをはじめそうたるメンバーが審査員を務める。

東洋のブロードウェイを目指す「地劇」の港、神奈川県から新たな才能の旅立ちを祝す汽笛が鳴る日は近い。